

## 中学生の親の全体的自己価値と夫婦関係の知覚の縦断的变化

### Longitudinal changes of global self-worth and perception of marital relationship among parents of junior high school students

山本 ちか

Chika YAMAMOTO

本研究の目的は、中学生の親の全体的自己価値と知覚された夫婦関係が2年間でどのように変化するか、全体的自己価値に夫婦関係は影響を与えているのかを検討することである。全体的自己価値は、どれだけ自分のことが好きか、満足しているのかなど自分自身を肯定的あるいは否定的に評価する程度を示している。知覚された夫婦関係は、「満足感」と「葛藤」の2側面からなる。中学生の親は、2年間で全体的自己価値の変化はほとんどみられなかった。知覚された夫婦関係についても2年間で変化はあまりみられなかったが、40歳代については「満足感」で低下がみられた。また母親についてはTime1の夫婦間葛藤が、Time2の全体的自己価値に否定的に影響していた。

The purpose of this study was to examine longitudinal changes of global self-worth and marital relationships, and to examine influences of marital relationships to global self-worth, among parents of junior high school students. Global self-worth was the degree to which the parent likes oneself as a person and is happy with oneself. Marital relations were assessed 'satisfaction' and 'conflict'.

Results suggested that global self-worth did not change during two years, both fathers and mothers. There were declines in 'satisfaction', for 40s. For mothers, conflict between father and mother at Time1 influenced global self-worth at Time2 negatively.

キーワード：全体的自己価値、夫婦関係の知覚、中学生の親、縦断的变化

Key words: global self-worth, perception of marital relationship, parents of junior high school students, longitudinal changes

#### 【問題と目的】

全体的自己価値とは、自分自身についての評価的感情であり、例えば自分のことが好きであるのか、自分に満足しているのかといった自分自身全体について肯定的に評価しているのか、それとも否定的に評価しているのかの程度を示すものである。

従来、青年期には、こうした全体的自己価値や自尊感情が著しく低下し(Jacobs, Lanza, Osgood, Eccles, & Wigfield, 2002<sup>1)</sup>など)、特に青年初期については、全体的自己価値が低いということが指摘されてきた(Harter, 1990<sup>2)</sup>; O'Malley and Bachman, 1983<sup>3)</sup>; Rosenberg, 1986<sup>4)</sup>など)。山本は日本の青年を対象として全体的自己価値についての一連の研究を行っており(山本, 2009<sup>5)</sup>, 2010<sup>6)</sup>, 2013<sup>7)</sup>など)、日本の青年は、青年期の間中全体的自己価値が低いということ、青年初期から青年中期にかけて特に低くなり、青年後期には若干肯定的になるということ、青年期の間、男子と比較して女子の全体的自己価値が低いということが見出されている(Yamamoto, 2011<sup>8)</sup>)。

それでは青年期から成人期になると、全体的自己価値はどのような様相を示すのであろうか。成人期は、青年期と同様に自分自身に対して否定的なままであり、全体自己価値は低いのであろうか。それとも青年期より肯定的になっていくのであろうか。成人期の全体的自己価値は安定しているのであろうか、それとも変化するものなのであろうか。

山本(2014)<sup>9)</sup>は、成人期に相当する中学生の親を対象に調査を行い、中学生の親の全体的自己価値については、比較的得点が高く、自分自身について満足しているなど肯定的に評価していることが見出されている。この研究では、中学生の親の全体的自己価値は、青年と比較して高いことが指摘されているが、その全体的自己価値の高さが安定したものなのか、一時的なものなのかは示されていない。

そこで本研究では、成人期に相当する中学生の親を対象として、子どもである中学生が1年生から3年生になる2年間に、親自身の全体的自己価値は変化がみられる

のか、それとも比較的安定しているのかを検討することを目的とする。

また、全体的自己価値が変化しているならば、その変化にはどのような要因が影響を与えているのであろうか。今回は、中学生の親の全体自己価値に影響を与えている可能性がある要因として「夫婦関係」をとりあげる。親自身が知覚した夫婦関係は、全体的自己価値に影響しているのだろうか。反対に全体的自己価値の高さが夫婦関係の知覚の仕方に影響している可能性も考えられる。そこで子どもが中学1年時と中学3年時の2時点のデータによる交差遅延効果モデルを用いて、全体的自己価値と親の夫婦関係の知覚の関連の仕方を検討することも目的とする。

本研究の具体的な検討事項は、以下の3点である。

**検討事項1**：中学生の親は、2年間で全体的自己価値に変化がみられるか、その変化は父母間で、また年代で相違がみられるのかを検討する。

**検討事項2**：全体的自己価値と同様に、中学生の親は、2年間で夫婦関係の知覚に変化がみられるのか、その変化は父母間で、また年代で相違がみられるのかを検討する。

**検討事項3**：夫婦関係が全体的自己価値に影響しているのか、あるいは全体的自己価値が夫婦関係に影響しているのか、全体的自己価値と夫婦関係の知覚との関連を、交差遅延効果モデルを用いて検討する。

## 【方法】

### 1. 調査実施時期

第1回目(Time1)：2002年9月中旬から下旬（子ども：中学1年2学期）。

第2回目(Time2)：2004年9月中旬から下旬（子ども：中学3年2学期）。

### 2. 手続きおよび調査協力者

調査は愛知県内9校と福島県内4校の中学生とその親を対象に行った。調査の依頼は学校を通して行い、中学生に自宅に持ち帰って父親及び母親に回答してもらうよう依頼した。なお、調査は強制ではないこと、記入しなくてもよいことを調査用紙に明記した。

第1回目調査では、2,836組に配布し、父親1,349名、母親1,598名から回答を得た。回収率は父親47.57%、母親56.35%であった。

第2回目調査では、2,283組に配布し、父親609名、母親702

名から回答を得た。回収率は父親27.69%、母親31.71%であった（父親84名、母親69名は未実施のまま返却があったため、回収率の算出にはこれらを除いた）。

今回の分析は、Time1とTime2の両時点において、全体的自己価値と夫婦関係の知覚の全項目に回答のあった710名（父親318名、母親392名）に行った。Time1時点での平均年齢は、父親43.69歳、母親40.63歳であった。年代ごとの人数の内訳は、Table 1に示した。

Table1 年代別の人数

		年代			合計
		30歳代まで	40歳代	50歳代以上	
父母	父親	73	229	16	318
	母親	206	183	3	392
合計		279	412	19	710

## 3. 調査内容

### (1) 全体的自己価値

自分に満足しているか、自分が好きであるかなど自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定（非常にあてはまる、かなりあてはまる、ややあてはまる、ややあてはまらない、かなりあてはまらない、非常にあてはまらない）で尋ねた。Harter(1986)<sup>10)</sup>の「Manual for the Adult Self-perception Profile」の中の全体的自己価値についての項目、DuBoisら(1996)<sup>11)</sup>のSelf-Esteem QuestionnaireとRosenberg(1965)<sup>12)</sup>の自尊感情尺度を参考に作成した（日本語訳は山本・松井・山成,1982<sup>13)</sup>を参考にした）。山本(2009<sup>9)</sup>, 2010<sup>6)</sup>, 2013<sup>7)</sup>の青年に対する調査において使用した項目と同じものである。「今の自分が好きである」、「今の自分自身に満足している」、「時々自分がだめな人間だと思う」、「時々自分のことがいやになる」、「私はもっと自分に自信がもてたらいいなと思う」の5項目である。

### (2) 夫婦関係の知覚

妻あるいは夫に対する「満足感」と、相手との意見の不一致など「葛藤」の2側面からなり、夫婦関係をどのように知覚しているのかを6段階評定（非常にあてはまる、かなりあてはまる、ややあてはまる、ややあてはまらない、かなりあてはまらない、非常にあてはまらない）でたずねた。「満足感」は、「妻（あるいは夫）の仕事や収入に満足している」、「妻（あるいは夫）との生活に満足している」、「妻（あるいは夫）の人がらに満足している」の3項目である。「葛藤」は、「子どものしつけに関

して、二人の間に意見の違いがある」, 「子どもの将来について、二人の間に意見の違いがある」, 「現在の家族の生活について、二人の間に意見の違いがある」, 「お互いに期待するものがすれ違っている」, 「妻 (あるいは夫) とけんかをよくする」の5項目である。

【結果及び考察】

1. 全体的自己価値の変化

(1) 平均値の変化

全体的自己価値の各項目の合計点を算出し尺度得点とした。得点の範囲は5点から30点である。平均値及び標準偏差をTable2に示した。そして2年間で全体的自己価値が変化したか、父母間及び年代間で差がみられるのかを検討するため、時点(2)×父母(2)×年代(2)の分散分析を行った。なお、年代については、50歳代は人数が少なかったため分析から省いた。

その結果、時点間に差はみられなかった ( $F=2.61, p=.107$ )。また父母間に差はみられ、父親の得点が有意に高かった ( $F=23.03, p<.001$ )。年代間に差はみられず ( $F=.39, p=.535$ )、交互作用もみられなかった。

(2) 個人の変化

Time1の全体的自己価値の合計点の平均値 $\pm 1\sigma$ を基準として、低群(父親16点以下, 母親14点以下), 中群(父親17~20点, 母親15~18点), 高群(父親21点以上, 母親19点以上)の3群に分類した(Table3,4)。父親, 母親

ともに約60%は群の変化がみられなかった。父親, 母親とも高群から低群へ, 低群から高群へといった急激な変化がみられたものは、ほとんどいなかった。

2. 夫婦関係の知覚の変化

(1) 満足感の変化

夫婦関係の満足感の3項目の合計点を算出し尺度得点とした。得点の範囲は3点から18点である。平均値及び標準偏差をTable5に示した。満足感が変化したか、父母間及び年代で差がみられるのかを検討するため、時点(2)×父母(2)×年代(2)の分散分析を行った。年代については、50歳代は人数が少なかったため分析から省いた。

その結果、時点間に差はみられなかった ( $F=2.24, p=.135$ )。父母間に差がみられ ( $F=19.84, p<.001$ )、父親の得点が有意に高かった。年代間にも差がみられ ( $F=5.65, p=.018$ )、40歳代よりも30歳代の得点が有意に高かった。また、時点間と年代間で交互作用がみられ、30歳代では時点間に差はみられなかったが ( $F=.03, p=.857$ )、40歳代では得点が低下しており満足感が低下していた ( $F=9.76, p=.002$ )。

(2) 葛藤の変化

夫婦関係の葛藤の5項目の合計点を算出し尺度得点とした。得点の範囲は5点から30点である。平均値及び標準偏差をTable5に示した。時点(2)×父母(2)×年代(2)の分散分析を行った。

Table2 全体的自己価値の平均値及び標準偏差(父母別, 年代別)

	30歳代				40歳代			
	Time1		Time2		Time1		Time2	
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)
父親	18.53	(4.35)	18.37	(5.28)	18.62	(3.86)	19.21	(4.51)
母親	16.87	(4.23)	17.32	(4.75)	16.98	(4.15)	17.12	(4.53)

Table3 全体的自己価値の個人の変化(父親)

		Time2			合計	
		低群	中群	高群		
Time1	低群	人数 (%)	59 (18.6%)	26 (8.2%)	6 (1.9%)	91 (28.6%)
	中群	人数 (%)	30 (9.4%)	66 (20.8%)	37 (11.6%)	133 (41.8%)
	高群	人数 (%)	6 (1.9%)	21 (6.6%)	67 (21.1%)	94 (29.6%)
合計	人数 (%)	95 (29.9%)	113 (35.5%)	110 (34.6%)	318 (100.0%)	

Table4 全体的自己価値の個人の変化(母親)

		Time2			合計	
		低群	中群	高群		
Time1	低群	人数 (%)	57 (14.5%)	36 (9.2%)	6 (1.5%)	99 (25.3%)
	中群	人数 (%)	38 (9.7%)	90 (23.0%)	45 (11.5%)	173 (44.1%)
	高群	人数 (%)	2 (0.5%)	37 (9.4%)	81 (20.7%)	120 (30.6%)
合計	人数 (%)	97 (24.7%)	163 (41.6%)	132 (33.7%)	392 (100.0%)	

その結果、時点間に差はみられなかった ( $F=.02, p=.893$ ). また「満足感」とは異なり、父母間に差はみられず ( $F=.52, p=.473$ ), 年代間にも差はみられなかった ( $F=2.50, p=.114$ ).

### 3. 全体的自己価値と夫婦関係の知覚の関連

#### (1) 相関

父母それぞれに Time1 と Time2 の「全体的自己価値」「夫婦関係の満足感」「夫婦関係の葛藤」の相関係数を算出した(Table6).

#### a. 父親

父親では、Time1 では「全体的自己価値」と「夫婦関係の満足感」「夫婦関係の葛藤」の間に関連がみられた。Time2 も同様であった。しかし Time1 の全体的自己価値と Time2 の夫婦関係の満足感の間には関連はみられなかった ( $r=.099, p=.077$ ).

#### b. 母親

母親では、Time1 と Time2, すべての変数間に関連がみられた。

#### (2) 交差遅延効果モデルを用いた検討

交差遅延効果モデルを用いて (Fig.1), 全体的自己価値

と夫婦関係の知覚の関連の検討を行った。分析は父母別に行った。

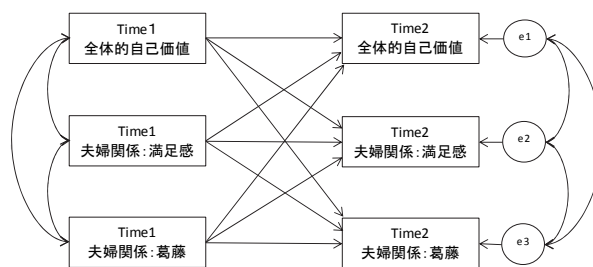


Fig.1 分析モデル

#### a. 父親

最終的なモデルの推定結果を Fig.2 に示した。適合度の指標は、 $\chi^2=3.93 (p=.560)$ , CFI=1.000, RMSEA=.000(90%CI=.000~.069)であり、十分な値であった。まず、全体的自己価値の変化については Time1 が Time2 に影響していた ( $\beta=.626, p<.001$ )。夫婦関係の知覚の変化についても、「満足感」と「葛藤」はいずれも Time1 が Time2 に影響していた (満足感:  $\beta=.523, p<.001$ ; 葛藤:  $\beta=.589, p<.001$ )。また、Time1 の夫婦関係の葛藤が Time2 の夫婦関係の満足感にマイナスに影響していた ( $\beta=-.104, p=.035$ )。

Table5 夫婦関係の知覚平均値及び標準偏差(父母別, 年代別)

		30 歳代				40 歳代			
		Time1		Time2		Time1		Time2	
		平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)
満足感	父親	12.53	(3.15)	12.50	(3.14)	12.56	(3.14)	12.13	(3.29)
	母親	13.81	(2.54)	13.99	(2.85)	13.18	(2.66)	12.79	(2.94)
葛藤	父親	14.47	(4.83)	14.64	(5.00)	15.51	(4.85)	15.41	(4.88)
	母親	14.95	(5.10)	14.32	(5.42)	14.64	(4.46)	15.09	(4.58)

Table6 相関係数

		Time1			Time2		
		全体的自己価値	夫婦関係: 満足感	夫婦関係: 葛藤	全体的自己価値	夫婦関係: 満足感	夫婦関係: 葛藤
Time1	全体的自己価値	.216 ***	-.247 ***		.630 ***	.099	-.192 **
	夫婦関係: 満足感	.296 ***		-.440 ***	.128 *	.569 ***	-.259 ***
	夫婦関係: 葛藤	-.361 ***	-.555 ***		-.184 **	-.341 ***	.594 ***
Time2	全体的自己価値	.660 ***	.237 ***	-.333 ***		.187 **	-.310 ***
	夫婦関係: 満足感	.166 **	.637 ***	-.468 ***	.275 ***		-.457 ***
	夫婦関係: 葛藤	-.243 ***	-.399 ***	.583 ***	-.330 ***	-.560 ***	

\*\*\*:  $p<.001$ , \*\*:  $p<.01$ , \*:  $p<.05$

斜線より, 右上が父親, 左下が母親の結果

しかし、全体的自己価値が夫婦関係へ及ぼす影響も、夫婦関係が全体的自己価値へ及ぼす影響もみられなかった。

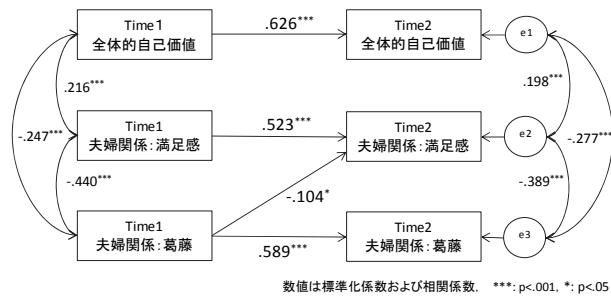


Fig. 2 最終的なモデルの推定結果 (父親)

**b.母親**

最終的なモデルの推定結果を Fig.3 に示した。

適合度の指標は、 $\chi^2=4.24$  ( $p=.237$ ), CFI=.999, RMSEA=.033(90%CI=.000~.097)であり、十分な値であった。全体的自己価値の変化については Time1 が Time2 に影響していた ( $\beta=.626, p<.001$ )。夫婦関係の知覚の変化についても、「満足感」と「葛藤」はいずれも Time1 が Time2 に影響していた (満足感:  $\beta=.547, p<.001$ ; 葛藤:  $\beta=.521, p<.001$ )。

また、Time1 の夫婦関係の満足感が Time2 の夫婦関係の葛藤にマイナスに影響し ( $\beta=-.111, p=.021$ )、Time1 の夫婦関係の葛藤が Time2 の夫婦関係の満足感にマイナスに影響していた ( $\beta=-.164, p<.001$ )。

全体的自己価値が夫婦関係へ及ぼす影響はみられなかったが、夫婦関係の葛藤が全体的自己価値へマイナスに影響していた ( $\beta=-.105, p=.009$ )。

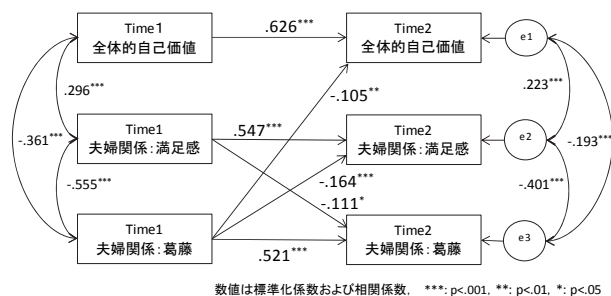


Fig. 3 最終的なモデルの推定結果 (母親)

**4. まとめ**

本研究の目的は、成人期に相当する中学生の親を対象として、子どもである中学生が1年生から3年生になる2年間に、親自身の全体的自己価値は変化がみられるのか、

親の夫婦関係の知覚が全体的自己価値に影響を与えているのかを検討することであった。

その結果、まず全体的自己価値の変化については、平均値の変化においても個人の変化においても大きな変化はみられなかった。平均値の変化の分析の際に年代間の差を検討した結果では、30歳代と40歳代で差はみられず、変化の違いもみられなかった。また交差遅延効果モデルの推定結果では、父母ともに Time1 の全体的自己価値が Time2 の全体的自己価値に影響していた。これらの結果から中学生の子どもを持つ30歳代、40歳代の親の全体的自己価値は2年間であまり大きな変化はみられないと考えられる。

また、交差遅延効果モデルを用いて、全体的自己価値と夫婦関係の知覚の関連を検討した結果、父母で関連の仕方に相違がみられた。父親では全体的自己価値が夫婦関係に与える影響も、夫婦関係が全体的自己価値に与える影響もみられなかった。しかし母親では Time1 の「夫婦関係の葛藤」の知覚が、2年後の Time2 の「全体的自己価値」に否定的に影響していた。父親は夫婦関係での満足感や葛藤は、その後の全体的自己価値に影響を与えないが、母親は夫婦関係での葛藤が多くなると、その後の全体的自己価値が否定的になっていく可能性が示唆された。

**【文献】**

- 1) Jacobs,J., Lanza,S., Osgood,D., Eccles,J., & Wigfield,A. Changes in children’s self-competence and values: Gender and domain differences across grades one through twelve. Child Development, 73, 509-527. (2002).
- 2) Harter,S. Identity and self development. In S.Feldman and G.Elliott (Eds.). At the threshold: the developing adolescent. Cambridge: Harvard University Press. Pp.352-387, (1990).
- 3) O’Malley,P.M. & Bachman,J.G. Self-esteem: Change and stability between ages 13 to 23, Developmental Psychology, 19, 257-268 (1983).
- 4) Rosenberg,M. Self-concept from middle childhood through adolescence. In J.Suls, & Greenwald,A.G.(Eds.), Psychological perspective on the self, vol3. (Pp.107-136). Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. (1986).

- 5) 山本ちか, 高校生の全体的自己価値の検討, 名古屋文理大学紀要, 9, 29-36 (2009).
- 6) 山本ちか, 大学生の全体的自己価値の検討, 名古屋文理大学紀要, 10, 15-22 (2010).
- 7) 山本ちか, 初期青年期の全体的自己価値および具体的側面の自己評価の発達的变化, 名古屋文理大学紀要, 13, 1-10.(2013).
- 8) Yamamoto Chika, Development of global self-worth and domain-specific self-evaluations during adolescence in Japan. 17th European Conference on Developmental Psychology, (2011).
- 9) 山本ちか, 中学生の親の全体的自己価値と具体的側面の自己評価の特徴, 名古屋文理大学紀要, 14, 1-8.(2014).
- 10) Harter,S. Manual for the Adult Self-Perception Profile. Unpublished manual, University of Denver, Denver, CO, (1986).
- 11) DuBois,D.L., Felner,R.D., Brand,S., Phillips,R.S.C., & Lease,A.M. Early adolescent self-esteem: A developmental-ecological framework and assessment strategy. Journal of Research on Adolescence, 6, 543-579 (1996).
- 12) Rosenberg,M. Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ; Princeton University Press, (1965).
- 13) 山本真理子・松井豊・山成由紀子 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-69 (1982).

#### 【付記】

本調査は, 科研費・基盤研究 (B) (1)14310055 (研究代表者: 氏家達夫, 研究分担者: 二宮克美, 五十嵐敦, 井上裕光) の補助をうけ実施された。本論文で報告した分析結果の一部は, 日本パーソナリティ心理学会第13回大会(2004)において発表した。

本調査の実施にあたり, 調査にご回答いただいた中学生の皆さま, 保護者の皆さま, 並びに調査にご協力いただきました各中学校の先生方に心より感謝いたします。

また本調査の共同研究者であり, 常日頃ご指導いただいている名古屋大学の氏家達夫先生, 愛知学院大学の二宮克美先生, 福島大学の五十嵐敦先生, 千葉県立保健医療大学の井上裕光先生に厚く御礼申し上げます。